ほない歴史通信
第９１号
2019（令和元年）.6.1

平成時代と大子町の学校

藤井達也

四月三十日で平成という元号に別れを告げ、新しい令和という時代を迎えました。三〇年以上続いた平成は、昭和、明治、応永に次ぐ、日本史上四番目に長い元号です。

平成という時代が現在から過去のものになった今、歴史という視点から平成に向き合う機会も徐々に増えてきており、「平成史」という名称での本や番組が発表されています。では、大子にとっての平成は、どんな時代であったのでしょうか。振り返るのにはまだまだ早いですが、平成という時代を大子町の学校という視点から見てみたいと思います。

国勢調査によると、昭和二十五年（一九五〇）には四万四五九八人にものぼった人口が、平成二年（一九九〇）の段階では二万七〇六七人となり、同三十一年四月一日時点で一万六三四一人となっています。平成の三〇年間で、人口が約六〇％にまで減ってしまうという深刻な人口減に見舞われています。とりわけ、若い世代の減少は深刻で、平成という時代を通じても、初原小学校（平成七年度廃校、以下同様）、槙野地小学校（同八年度）、池田・矢田・浅川・上岡小学校（同十三年度）、西金小学校（同十七年度）、下野宮小学校（同二十二年度）、黒沢中学校（同二十七年度）、黒沢小学校（同三十年度）と多くの町立の小中学校が廃校を迎えています（統廃合を通じて名前を変え、現在も存続している学校は除く）。大子町にとって、平成という時代は、統廃合によって多くの学校が閉じてしまった時期であったのです。

学校は、地域社会にとっても核となる施設で、学校行事が地域の大イベントであり、地域の人々を結びつける役割を果たしてきました。学校活動を通じて、地域の人々・子どもとその家族・教師がつながり、地域のコミュニティが作られてきました。大子町で生まれ育った私も、地域の人々との関わりの中で育てられたという思いを強く持っています。その学校が閉じてしまうことは、とても寂しく、つらいことです。

閉じてしまった学校を取り戻すことは難しいですが、学校に関わり、育てられてきた私たちにとって、その記憶や記録を将来に伝え、残していくことが重要であると思われます。公文書として作られた学校運営の書類や学校に残された資料はもちろんのこと、私たちの手もとに残る写真・映像、学校からの配布物、学校での創作物等も大変貴重な記録です。また、実際に学校を利用したり、地域の人間として関わったりした私たちの記憶も、未来に手渡していきたい大切な宝です。

統廃合によって、地域と学校との距離が変化してしまった今、明治から連綿と続く、地域と関わりあう学校という姿を振り返ることはとても意義深いことだと思います。現在も続く地域の活動の中で、昭和・平成時代の学校の様子を思い出して、語り合う機会を持ってみるのもよいのではないでしょうか。

幸い、平成二十七年度から大子町に生まれ育った子供たちが、保護者や地域の人々と関わり合う中で地域を知り、自己の生き方について考える「大子学」の授業が小中学校で行われています。令和という時代が、今後の大子を支える人々を育てた時代として語られる日を楽しみに待ちたいと思います。

（水戸市在住）

幼年期の思い出

大畠　一芳

私は、昭和二十四年（一九四九）三月に佐原村初原に生を受け、三十年四月、家のすぐ近くにある初原小学校に入学しました。県道を挟んで家の真向かいに小学校があり、道を横切ればもう学校でした。当時、初原小学校は佐原村立佐原小学校の分校であったと記憶しています。一年生の時は複式学級、二つの学年が同じ教室で一緒に授業を受ける形で、担任の先生は苦労なさったのではないかと、今にして思います。一方の学年に課題を出し、生徒がその課題に取り組んでいる間にもう片方の学年を教える、といった形式でした。三十一年に独立して初原小学校となるのに伴い、複式学級は徐々に解消されていったと思います。その意味では複式学級は一時的な授業形態で、貴重な体験をしたことになります。

当時、授業で使う資料は謄写版による印刷でした。いわゆるガリ版印刷です。インクをつけたローラーを転がして一枚一枚印刷するのですが、ローラーを転がした後すぐにページをめくる助手の存在が欠かせません。私はよく先生のお手伝いで、ページめくりをすることがありました。当時の小学校には宿直制度があり、必ず先生が一人当直として泊まっていました。五、六年生になると宿直室に遊びに行くこともあり、そこで、先生は勉強の遅れている子に算数の問題を解かせたり、漢字の練習をさせたりしていました。今考えると信じられないようなことですが、田舎の小学校の教育の良さはこのあたりにあったのかもしれません。宿直の先生にカレーライスをご馳走になった記憶もあります。

放課後の遊びは、ビー玉遊びと「ぱーぶち」と呼んでいた「めんこ遊び」が主流でした。ビー玉遊びでは「丸出し」と言う遊びが主流で、地面に描いた円形の中に参加者全員がビー玉を一個置き、それを数メートル離れた場所から狙ってはじき出すというものです。ビー玉の中でも色のついたものや模様の入ったものは「色ビー」と呼ばれ、希少価値がありました。他方、「ぱーぶち」の遊び方には二通りあり、一つは「角出し」と呼ばれるもので、乾いた、滑らかな、硬い土の上に正方形を描き、そこに参加者が自分のめんこを置き、それを自分のお気に入りのめんこを使ってはじき出します。もう一つは、相手のめんこを、自分のめんこと足を使ってひっくり返すものです。ビー玉であれ、めんこであれ、これらは近くの駄菓子屋で買うことができました。

季節によって遊びは異なりましたが、遊びの基本はすべて手作りのおもちゃでした。杉の木が実をつける季節は、篠竹で「杉の実鉄砲」を作りました。スギ花粉が人を苦しめる昨今からは想像もつかないことですが、杉の実、それも花粉を飛散させる前の杉の実を鉄砲の弾として使います。まっすぐな細い篠竹を見つけて、節から節までを上手に利用するのがコツです。私はひどい花粉症に悩まされていますが、子供時代のつけが回ってきたのかもしれないと思う今日この頃です。今となっては杉の実で遊んだことが信じられません。また竜の鬚が瑠璃色の実をつける頃は、その実を弾として利用する「ネコ玉鉄砲」で遊びました。どうして「ネコ玉」と呼ぶのか調べてみましたら、猫玉とは竜の鬚の別称であるということです。ズボンのポケット一杯に竜の鬚の実を詰め込み、敵味方に分かれて打ち合うわけです。「杉の実鉄砲」も「ネコ玉鉄砲」も紙鉄砲の原理で、篠竹の太さの違いだけでした。

学校は遊びの延長でしたから、勉強をしたという記憶はほとんどありません。今にして思えば、社会全体が学校の勉強を中心に動くような状況ではなかったのでしょう。まだ日本全体が生きることに精一杯であったからでしょうか。昭和三十年代は、貧しくてもおおらかな時代でした。古き良き時代、本当に懐かしい時代となりました。

（水戸市在住）

教員かけ出しの頃の思い出（中）

―最初の赴任地依上中学校での日々―

高根信和

社会科の教員免許状を持っていた私は、昭和三十六年四月一日に赴任した依上中学校では、社会科ではなく理科を教えることになった。当時の依上中学校は、茨城県から体育科の実験学校に指定されていたので、大子部会の各学校から体育担当の教員が来校して授業を参観した。授業はすべて公開されるので、その準備のため、中学一年の理科の指導案を慣れない鉄筆で原紙に書き、ガリ版で印刷して配布したことを思い出す。生徒達が「先生、実験、実験」と叫んだこともあり、実験を中心に公開授業を進めた。

また理科の教員は、校務分掌で、進駐軍から配給されたナトコの映写機のほか、ＰＴＡの予算で購入した北辰電機製の一六ミリの映写機の管理をまかされていた。映写機の扱い方等は知らなかったので、赴任した年、県立図書館の視聴覚室で開かれた映写機の操作についての講習を何回か受けた。この受講証があると同図書館内の各種映画を集めたライブラリーが無料で利用できるので、そこから映画フィルムを借り、常陸大子駅止めで送ってもらったことが何度もある。例えば、父兄会の時に三年生の教室の仕切りをはずして上映し、とくに三船敏郎主演の「無法松の一生」を上映した時には父兄は涙を流しながら鑑賞し、上映後には感謝されたものである。また秋祭りの晩には、迎えに来た耕耘機に映写機を乗せて運び、相川の越方神社境内でも上映した。当時は、夜になると電圧が下がり映写機の回転数が落ちるので、その時は慌ててスライダック（変圧器）で電圧を百ボルトに上げたり、良いシーンのところでフィルムが切れ、直す時間に手間取って観客から怒鳴られる始末。何とか終了し、御神酒をいただいていい気分になり、また耕耘機の荷台に乗せられて学校へ戻った。その夜は、学校の宿直室で過ごした。

昭和三十八年十一月二十七日、芦野倉の神官谷田部尅熙氏から、畑を耕していたら地下五〇センチ位のところに住居跡らしい石囲いを偶然見つけた旨の連絡があった。早速、町内のバイク店で父に買ってもらったホンダのスポーツカブ（原付バイク）に乗って現場に向かった。その畑はゴボウの収穫中で、このままでは煙滅する恐れがあると判断した。豊田敏夫校長や塚田三郎教頭の了解を得たうえで、高梨保彦、徳蔵道昭、木村忠志らの先生方、郷土クラブの生徒達と共に、十二月一日から五日まで調査を行った。

授業終了後の放課後、発掘道具を持って塙平手平内のゴボウ畑へ出掛け、寒風の吹く中で作業を続けた。幅二メートル、長さ一〇メートルのトレンチを設定して発掘したところ、住居跡一基が確認できた。規模は縦三・三五メートル、横四・三〇メートルのやや長方形、深さ約三〇センチである。併せて、中から多くの土師器が出土した。住居跡には柱穴がなく、南壁に接して拳大の河原石を使った石囲いの竈跡があり、床面が焼けていて長年使用されたものと思われた。

町内では恐らく初めての発掘調査で、生徒達は遺物が出土するたびに感動した。奈良時代頃の塙平の人々の生活ぶりを現場で説明したが、今でも貴重な経験を共に味わったと思っている。私にとっては、理科の教員から社会科の教員に戻ったとの錯覚を覚えた僅かなひとときであった。なおこの調査結果は、『大子町史 通史編上巻』の第二編第二章の中で紹介されている。（水戸市在住）

昭和３８年１２月５日 塙平遺跡にて

四三万人の大移動（下）

野内泰子

昭和十九年（一九四四）八月の半ば、学校から六年生は全員登校するようにとの連絡があった。登校して教室に行くと、机が口の字の形に並べられ、そこに全員が中央を向かって坐らせられ、机の上にはおしるこが配られた。先生から、学童疎開により学校での勉強はできなくなり集団疎開、縁故疎開と、それぞれの都合で別れることになったので、おしるこを用意したこと、これを食べて笑ってお別れしましょうというようなお話があった。当時、小豆はおろか砂糖もお餅も手に入るものではなかったが、あとで聞いた話によると、六年担任の先生方があちこち走り回って材料を集め、学校の小使いさんと一緒に作って下さったとのことだった。私の学校では、先ず六年生だけが疎開することになったのである。

みんな、言葉もなく涙をこぼしながらおしるこを食べて別れた。仲よしの友達と来春の受験のときにまた会いましょうと言って別れたが、それきり今に至るまで会うことはなかった。

私は田舎に縁故疎開したので、十分ではなくとも食べ物は口にすることができた。しかし、集団疎開した児童の中には、ヘビやカエルも食べた、イナゴやハチの子はご馳走だったと後々話した子が少なからずいたという話を聞いた。戦争は、否も応もなく国全体を苦難と悲嘆の淵に突き落とす。児童の命の安全を考えて国が実施した学童疎開であったが、その政策も決して万全ではなく、四〇万人もの子ども達がいつまでも消えることのない心の傷を負ったのは間違いない。

ところで、大子地方にも疎開児童は来た。東京都向島区吾嬬第一国民学校と同中川国民学校の児童達である。当時の記録によって数に多少の違いはあるが、大子町四六一人、袋田村三五〇人、宮川村一二〇人、合わせて約一〇〇〇人の児童がやってきていくつかの旅館や寺に分宿している。

その生活の様子はどんなものだったのだろうか。当時、大子国民学校の五年生だった熊木歌子さん、袋田国民学校の六年生だった野澤満さんに聞いてみた。この学童疎開が行われるについては、国の方針は各地の実情並びに地域関係を考慮し、関係学級に分散編入等をして教育を行うこと、各県教育の方針にのっとって行うこととしていた。また、受入れ当日には最寄駅に出迎え、駅前で歓迎の行事を行ったと記録にある。けれども、二人とも駅前での歓迎行事などをした記憶もないし、そんなに大勢の疎開児童と机を並べて学習した覚えもないとのことであった。

このことから考えると、国の方針と実際の有り方とはかなり違っていたように思われる。もし、疎開児童を受け入れたために、児童数が倍近くにふくらんだとしたら記憶に残らない筈はないし、実情は大変なものだったと思われる。また、当時大子国民学校の高等科二年生だった會澤晴美さんによると、疎開児童達の宿舎へ手伝いに行き、大釜に湯を沸かして衣類の煮沸消毒をしたことがあるとのこと。シラミ退治のためである。そのすさまじい様子は、今に至るまで忘れられないと言っていた。

学童疎開については、大子のことではないが、沖縄からの疎開児童を乗せた対馬丸が撃沈されたことや、受験のために地元に帰った六年生が、昭和二十年三月十日の東京下町大空襲の犠牲になってしまったことなど、決して忘れてはならない痛ましい事件もあったのである。

参考文献　『日録　二〇世紀』（講談社）

（大子町在住）

続・大子町役場庁舎の新築に寄せて

大金祐介

現在の大子町は、昭和三十年（一九五五）三月三十一日、保内郷一町八か村の大合併により県下最大の町として誕生した。しかし、そのような華やかさとは裏腹に、誕生したばかりの大子町には課題が山積していた。その一つが役場庁舎の新築であった。

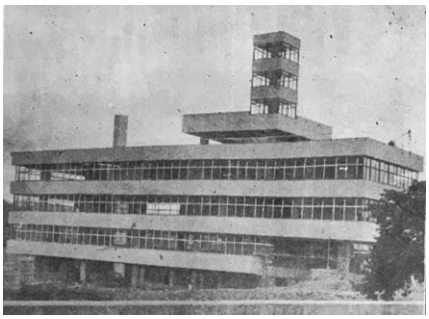
合併当初、大子町は旧大子町役場庁舎を本庁舎としていた。本庁舎には、八課一九係が置かれ、町長以下約六〇名の職員が勤務していた。しかし旧大子町役場庁舎は、大正十三年（一九二四）、まだ役場に勤務する職員が町長以下十数名ほどしかいなかった時代に建てられたものであった。そのため、事務処理や窓口対応に支障をきたすほど役場庁舎の狭隘さが著しかった。役場庁舎の増改築や隣接地に分庁舎を設けるなどの措置が講じられてはいたが、十分ではなかった。状況を改善するため、大子町は役場庁舎の新築を計画するが、道路や橋梁の整備、教育施設の充実など、住民生活に直結する課題が山積していたためこれら諸課題の解決を優先し、役場庁舎の新築は後回しにせざるを得なかった。役場庁舎の新築に手が及ぶようになったのは、合併から四年が過ぎた頃であった。慎重に計画が練られた後、昭和三十五年五月の臨時町議会の議決を経て、三十五年度、三十六年度の二か年継続事業として役場庁舎の新築がようやく実施されることになった。

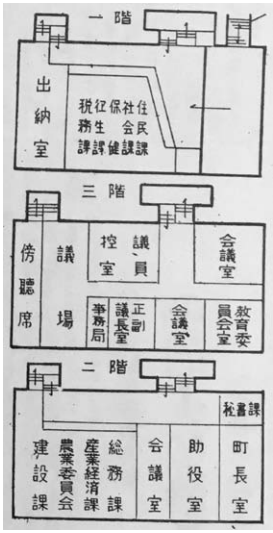
新庁舎は、大子町が役場庁舎の用地として新たに取得した大子町大字大子字瀬戸田八六六番地に建設された。新庁舎の設計は岡設計事務所が担当し、施工は株木建設株式会社が請け負った。建設工事は、昭和三十五年十月に起工し、翌年七月に竣工した。完成した新庁舎は、鉄筋コンクリート造り、地上三階、地下一階で、市街地を一望できる望楼を備えていた。バランスト・ラーメン構造と呼ばれる新工法が採用され、耐震性を確保しつつも柱の数を減らして空間を有効的かつ開放的に使えるような工夫がなされていた。県下最大の町にふさわしい偉容と先進性を兼ね備えた役場庁舎であった。建設には、四三六〇万円の費用を要した。

昭和三十六年八月一日、新庁舎において事務の取り扱いが開始された。次いで、同年九月十九日、町内外の多数の関係者を招いて竣工式が開催された。竣工式に合わせて大子町商工会が三波春夫ショーを開催するなど、町は新庁舎竣工の祝賀ムードに包まれた。

このようにして建設された現在の大子町役場庁舎は、昭和三十六年以来今日に至るまで、実に五八年の長きにわたってその役割を果たし続けている。それだけに、間もなく新しい大子町役場庁舎が建設され、その役割を終えるのかと思うと寂しさを感じずにはいられない。

（大子町在住）





大子町役場新庁舎の写真と平面図

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の三）

―特産品・りんごのルーツを探る（一二）―

りんご栽培に対する大子町の支援策の二つ目は、病害虫防除である。栽培過程での様々な作業の中でも、売れるりんごをつくるためにとりわけ重要なのが病害虫防除であった。

例えば、本誌前号で紹介した藤森要吉さんのガリ版刷り小冊子『りんご栽培』では次のように述べている。「りんごは薬剤によって作ると云われておる位にりんご栽培の中にあつて病害虫の問題は大切な分野をしめている。たとえ他の管理が上手に行われたといえども防除なくして、販売に供されるような立派な果実を生産することは不可能である」、と。とくに、りんご栽培の南限と言われる大子地域にあっては、「気候的に温暖、多湿であるため病気が発生するし、虫も多いし。だから防除をちょっと怠ると虫にやられるか、葉っぱが落ちちゃう。防除でりんごを保護しなければ売れるようなりんごはできないんだということで、防除には一番力を入れたと思う」（木澤源一郎氏談）との証言が示すように、防除作業の重要性は他の産地に比べてより増していた。

ただ、一口に防除と言ってもその作業手順は決して単純ではない。防除の効果を最大にするためには適期、適薬、適量の三原則を踏まえる必要があった。言い換えれば、「撒布して一番効果のある時期」と病害虫の「発生前或は発生後に一番効果の高い薬」を正確に選択し、「効果の面ないしは薬価の点などよりみて最も適した量」（前記『りんご栽培』）を厳格に守ることが必須であった。

防除が不可欠だとの認識は大子町も共有していたようで、「病害虫防除対策はりんご栽培の本命」（「昭和四五年度決算に関する附属資料」）と位置付け、支援策の中心をなすとともに多額の補助金が投入されている。商品としてのりんごの良し悪しに直結する病虫害防除に対して、町はどのような支援を行ったのであろうか。

昭和三十五年度については、まず「丸山式動力噴霧機四台を購入して、農協連絡協議会、りんご部に貸与し、病虫害防除の徹底を図った」とし、四台分合計三〇万円の補助がなされた。「丸山式動力噴霧機」とは、明治二十八年（一八九五）創業の老舗で、かつ大手メーカーでもある丸山製作所が生産した防除機であり、「その頃は丸山が一番良かった」（木澤氏談）と評されていたものである。また、貸与先の「りんご部」とは、翌三十六年度から補助の受け入れ先として常に対象となる大子町農協りんご部のことだと思われる。これら四台が、どの地区でどのように活用されたのかは不明である。他に、薬剤購入費として二万円が助成されている。

この頃防除機への要望が強かったのであろう、翌昭和三十六年度にも「りんご、こんにやくの病害虫防除を目途として動噴一〇台、背負噴霧機二六台の共同購入に対して一六％以内の補助金」が交付された。これら防除機のうち、りんご関係の台数は明らかでないが、これらと併せて、「りんご病害虫防除補助として大子農協りんご部へ」一〇万円が配布された。防除機への支援はさらに続く。三十七年度には、二台の動力噴霧機購入に対して各五万円、計一〇万円が補助された。防除補助は、前年度と同様大子農協りんご部経由で一〇万円が助成された。

人力式の背負噴霧器であれ動力式噴霧器であれ防除が欠かせないりんご生産者にとっては、こうした機器類と薬剤費への補助は大きな支援になったことは間違いない。ただ、機器類はあくまでも共同での利用である。「いつは誰、いつは誰と日割を決めて防除したが、機械を持ち歩いて大変だったんです。なかなか回って来なくて、ピッタリいかなくて」。とくに動力式の台数が少ないため、防除の原則の一つ「適期」に間に合わないこともあったようである。その場合は、個人で持っている「小さな背負い噴霧機で何日もかけてやるしかなかった」（木澤氏談）、という。（齋藤典生）

大子町の経済更生運動と
農村改良劇「栄ゆく村」（三）

昭和四年（一九二九）、アメリカに端を発した大恐慌は世界規模の恐慌に拡大し、翌五年には日本の農村を直撃した。繭をはじめとして米麦その他ほとんどの農産物の価格が暴落し、農家の生活は窮乏に喘いでいた。こうした農村の窮状に対して、救済を求める動きが全国に広がり、政府は昭和七年八月に救農臨時議会を召集し、農村救済のための二本柱として時局匡救農村振興土木事業と農山漁村経済更生計画を決定して、農村の再建策に踏み出すことになった。

時局匡救農村振興土木事業は、道路建設や河川改修などの公共事業を実施し、農村の振興と失業者の救済を図るものであった。大子町では昭和七年度の事業として、泉町寺田旅館前から大子警察署裏の瀬戸田を通り大子駅に通ずる延長五〇三メートル八〇、幅員五メートル五〇の新設道路（瀬戸田通り）が認可され、八年一月二十六日起工、三月十三日竣工した。また八年度の事業として、金町から後山を通り愛宕町県道大子―馬頭線に通ずる延長七一〇メートル、幅員四メートル五〇の新設道路（後山通り）が認可され、十二月五日に起工式が行われた。

農村振興土木事業と並行して推し進められたのが、農山漁村経済更生計画の策定である。この事業は、農民の自力更生と隣保互助の精神をもって、疲弊した農山漁村の経済再建を計画的、組織的に図っていくというものであった。茨城県では、国の農山漁村経済更生運動方針に基づき、各年度ごとに町村を指定し、経済更生の具体化に取り組んだ。大子地方では、昭和七年度に大子町と佐原村、八年度に袋田村と上小川村、九年度に黒沢村がそれぞれ指定を受けている。

昭和七年度に指定を受けた大子町は、直ちに経済更生委員会を組織し、更生計画樹立に関する調査会を開き、計画案の策定に当たった。委員会は会長ほか委員二九名をもって組織され、会長には大子町長石井栄次郎、委員には農会長川口利吉、農会技手藤田里盛のほか助役、県会議員、町会議員、農事組合長、農学校長など町の有識者が選ばれた。計画案は農村不況を打開するための自力更生の途を講じたもので、経営改善による生産性の向上や生活全般にわたる改善などを柱としていた。

大子町の経済更生計画は、その事業の大要が四つの分野から構成されている。その一つ生産方面の事業では、水陸稲麦作の改良、肥料の共同配合、副業増産奨励、害虫駆除予防、乾田利用などが奨励された。次に経済方面の事業では、堆肥共同積込造成、自家用醤油製造奨励、青物市場の拡張、負債の整理などである。さらに社会方面の事業では、時間の励行、社交上礼儀の改良、衛生および火災予防の三項目である。このうち社交上礼儀の改良では、冠婚葬祭費用の節約、引物の廃止、結婚披露宴の簡素化などが奨励された。また精神方面の事業では、農業教育の促進、勤倹の美風と労働の尊重を醸成するための講話会、講習会の開催などが掲げられた。

こうした大子町の経済更生運動は、大子町農会が中心となり、計画の実行に当たっては、農会が各地区に設立を奨励した農事共同組合が大きな役割を果たした。次回はこの経済更生運動の成果と、そして農村改良劇「栄ゆく村」について記すこととしたい。

参考文献　『大子町史　通史編　下巻』（平成五年）
『茨城県の百年　県民百年史8』（一九九二年）
『農村更生と中心人物』帝國農會（昭和十年）

（井上和司）

新たな仕事への抱負

生涯学習並びに国体推進室の総括として、四月より教育委員会へ異動してまいりました。

文化やスポーツ、地域活動など業務内容も幅広く、戸惑いながら仕事をこなしています。

「ほない歴史通信」については、もちろん以前から愛読させていただき、非常に興味を持っていました。私が今まで携わってきた大子産米・奥久慈茶・奥久慈りんご・奥久慈大子こんにゃく・常陸大黒・奥久慈しゃもなどの特産品にも様々な歴史があり、面白い素材でもあると思いますし、大子漆や大子那須楮については文化庁管轄であり、これからも携わることとなり私自身よろこんでいます。

大子町は、他の市町村にはない魅力的な歴史と素材にあふれており、今では、「大子学のすすめ」として、小中学生に大子町の歴史や伝統文化を学ぶ機会が設けられています。私が子どものころにはなかった素晴らしい教育制度だと思います。大子町を理解し、大人になってからも故郷を自慢できる大人になるための情操教育にも役立つのではないでしょうか。

私としては、大子町の教育の一翼として取り組み、今後は微力ではございますが、調査研究員の先生方の協力のもと、大子町の歴史や文化の情報発信を積極的にしていきたいと考えています。

（藤田貴則）

大子漆

大子那須楮

編集後記

私が大子町へ嫁いで来て、十数年になります。

結婚する前は、「大子町といえば？」と問われると「袋田の滝」としか答えられないという感じでした。

大子町へ来て見ての第一印象は、歴史的な建造物等が多く見られることでした。しかし、町の中の古い建物や廃校となった学校の木造校舎等が充分活用されていない場合が多く、魅力的な歴史的建造物等が他市町村の人達にはあまり知られていないのが残念だ、と思いました。

四月から生涯学習の仕事を担当することとなりました。大子町の歴史的建造物や史跡等の魅力を、様々な機会を通じて他市町村の方々へ発信できるよう取り組んでいきたいと思います。

（大金真理子）

「ほない歴史通信」のバックナンバーについて

本誌「ほない歴史通信」のバックナンバーが多数ございます。ご希望の方には差し上げますので、中央公民館の生涯学習担当までお申し出ください。　連絡先　０２９５（７２）１１４８

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　齋藤　典生（大子町歴史資料調査研究員）
　　井上　和司（大子町歴史資料調査研究員）
　　藤田　貴則（大子町教育委員会事務局）
　　大金　真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
　　久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館☎０２９５（７２）１１４８